

# 大地

第 49 号  
2015. 5. 20. 発行  
浄 國 寺  
上越市朝3丁目14-10  
☎025-523-5724

## 俳句

山崎 睦

又年輪加え芽吹きの大銀杏

春眠といふ夢の中母の顔

縄跳びや薫風輪切り輪切りして

退院の歩も軽くなり蓮の華

今日からは八十八歳夏を行く

恋の鉦叩く水鶏闇深し

今日の事思い返して夕端居

(平成十五年作)

## ニホンかニッポンか

山崎隆史

日本は「にほん」とも「にっぽん」とも読めます。どちらが正しいのかといえ、どちらも正しいのです。

訓読みなら「ひのもと」、日出る処であり、東の方角という事です。元々、国内で使う言葉ではなく、外国との遣り取りをする時に使う大陸向けの国号なので、大陸の立場から見た名付けになっています。大陸風の発音を日本語風になまめて「にちほん」となり、「はちほん」が「はっぽん」と変化すると同様に、「にほん」あるいは「にっぽん」と変化しました。大陸の別の地方の読み方から「じっぽん」という読み方もあったようです。

現在の欧米各国における日本の呼び方(ジヤパンなど)は、マルコ・ポーロの『東方見聞録』の「ジパング」から来ているようです。これはマルコ・ポーロが東方(当時は元)を訪れた時、その地域での「日本国」の読み方が「ジーパングオ」というような発音だったから、という説が有力です。

親鸞聖人は著作の中で、日本のことを様々な表現をしています。日本、日域、和国、和朝などです。

『高僧和讃』の源空聖人の章で「日本一州ことごとく浄土の機縁あらわれぬ」とありま

す。親鸞聖人が当時「にほん」と読んだのか「にっぽん」と読んだのかは分かりませんが、大谷派(お東)では現在「にっぽん」と読むことになっています。

『正信偈』の中では「印度西天之論家中夏日域之高僧」、「教行信証」の総序では「西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈」と表現しています。

和讃の『皇太子聖徳奉讃』で「和国の教主聖徳皇」と表現しています。

『高僧和讃』の末尾では、源信和尚と源空聖人の所属を「和朝」としています。

『尊号真像銘文』で「日本源空聖人の真影」、「和朝愚禿釈の親鸞が正信偈の文」とあります。

和国は旧くは「倭国」という字だったのを、自ら良い字に置き換えたものです。「日域」は「日本」とほぼ同じ、「和朝」は「和国」と同じと考えて良いでしょう。

その他、『正信偈』に「真宗教証興片州」という表現がありますが、これは「このよう小さな島国で」真宗の教証が興った、という意図があると思われます。

「大陸から見て東」という日本という国号といい、「小さな島国」を思わせる片州という表現といい、昔から日本人は、自らの国の事を、「世界の東の端にある小さな国」と思っていたのでしよう。

# 父のこと

北城町 蟹江教子

窓の外に緑が一面に広がる季節になるとカーテンを開け、窓辺に立って見惚れ、指を五、七、五、七、七と折り曲げて短歌を詠んでいた姿が目に見えます。

父は、百二歳と六十七日の人生を生き切つて、去る三月十八日未明、そっと人生の幕を閉じました。

二歳で父親を亡くし、苦勞して教師になった事や、教員生活が充実していて楽しかった事などを時折話していました。又、家庭では私や妹を厳しく、そして伸び伸びと育ててくれた事を思い出します。退職後は、町内会長や、神社の代表を務めるなど地域の仕事をしていました。七十歳を過ぎる頃から祖母の介護や、母のリユウマチを気遣いながらも、自分の趣味の幅を広げるようになりました。

最初は鉛筆で近隣の風景を描いていましたが、間もなく老人趣味の家で水彩画を学ぶようになり、作品も爽やかな色彩に色取られるようになりました。この頃になると晴れた日には、リュックに画材を詰めて、電車でいもり池まで出かけ、妙高山を描くようになりました。完成した作品を壁に掛けて、家族の反応をとて楽しそうに聞いていました。

しかし、九十歳を過ぎて視力が衰えるようになると、NHKの短歌入門講座を受講するようになり、机上に短歌に関する本も並ぶようになりました。

◇春風に風の匂いがあるという

マスク外せる孫のつぶやき 九十二歳作

◇知らぬことまだまだあると気がつけば

卒寿の今も力湧くなり 九十三歳作

◇さくさくと食めば音する竹の子の

歯ざわり求め春の朝市 九十七歳作

◇長らえて芽ぶきの春にまた会いぬ 今朝の

目覚めのありがたきかな 九十七歳作

◇杖ついて歩けばいつも歩けたる

この道いやに遠く思えり 九十九歳作

◇すべるはず無きに転びしその日より

杖をたよりとなして幾日 九十九歳作

この頃から歩く事が不自由になり、歩行器を使用するようになりました。身体の不自由さが増したのに、歌は更に自由自在になっていきました。

◇ひらがなのるとゑはいつも威張ってて

書き取りの時よくまちがえた 九十九歳作

◇しんしんと雪積む夜はさびしくて

早めに寝よと言ひし母ありき 九十九歳作

◇誰よりも明日という日にあいたくて

カーテン少しあけてねるなり 九十九歳作

◇吹き荒れし吹雪ようやくおさまりて

かがやき出し月のつめたさ 九十九歳作

◇古い込みてたまるものと背を伸ばし

見上げる空に芽吹の見ゆる 九十九歳作

毎日たくさんの歌を詠み、朝日新聞に掲載されましたが、百歳を越える頃から車椅子での移動を余儀なくされました。百二歳の一月から、ショートステイで生活する事になりましたが、記憶力も、創作意欲も劣る事がありませんでした。この期間に作った歌五首が新聞に掲載され、中でも亡くなる前日に、第一席を飾った歌は、ベットの傍らで読みあげると大変喜んで嬉しそうでした。昔、訪ねた土地で見た風景だと言っていました。なぜそれを歌にしたのか不思議です。又、死の直前にそれを聞いて逝ったのかと驚きました。

◇やぶの中みんな小さくかたむきて

名前も読めぬ墓ならびたり 百二歳作

選者の千村ユミ子さんが、父の死を知り、「歌は生の肯定だと思っているが、蟹江さんの歌は、まさに生の肯定そのものでした。」と書き送って下さいました。喜んでいふ事と

思います。

父の傍らで七十年も過ごして来て、改めて歌を詠みながら、飾らない、若々しい心持ちを懐かしく思い出しています。

蟹江さんは百二歳の長寿、温かな家族に囲まれ、趣味を活かした悠々自適の生活を送られた。選者千村氏の「蟹江さんの歌は、生の肯定そのもの」との言葉は意味深い。

# 井の中の蛙

山崎隆昌

洋の東西を問わず古くから諺（ことわざ）は生活の中で使われてきた。「犬も歩けば棒に当たる」いろはカルタもこの類いである。広辞苑によれば「古事記」の上巻にすでに諺が記されているという。

諺は、教訓めいたことを、解りやすく、上手いたとえを用い、時に皮肉を込め、ユーモアを含ませた短い言葉で鋭く言い切る。聞く方は「あんな上手いこと言いますなあ」と感心し、思わずニヤリとするのだ。

諺に似たものに漢文調の格言（金言）があり、「温故知新」「画竜点睛」等の四字熟語は良く知られるところである。

ただ格言は表現が格調高くなるけれど、使い方により、高圧的で上から目線の物言いとなることもあるので気を付けなければならぬ。諺にも「金言耳に逆らう」と言う。

ところで、広く知られている古い諺の一つに「井の中の蛙大海を知らず」がある。

自からの考えや方法に固まり、世の中の自分とは違う他の考えや方法に目が行かないことを意味する諺で、世間知らずのたとえ

「出世間」や「世間虚仮」に見られるように世間は仏教の言葉で、人間が生活する境界の

ことを言い、煩惱に右往左往する世の中のことを表している。私たち娑婆の世界。

諺にある「大海を知らず」の大海（世間）は、仏教でいう世間とは少し違い、広い世の中の考え方や知識、習慣、社会ルール等を意味し、社会生活をうまく成り立たせている社会常識とも言えようか。

私たちは生活するに必要な社会常識を、どのように身につけていくのだろうか。

考えるに、世間を学ぶのは幼い時からの人間関係に負うところが大きいと思うのだ。

机に座り改めて教えてもらうようなものではなく、親子、家族、親類、近所友人、職場等々における人と人の交わりの中から自然に教えられ、気づき、おのずと身につけてくるものではないかと思う。

悲しいかな、現代は無縁社会と言われ、豊かな人間関係を築き交わりを深めていくことが難しい時代だ。パソコン、スマートフォン、携帯電話など一見すると自由に人間関係を作れそうな社会環境のようであるが、逆に人と人が直接に関係する場が少なくなり、人との交わりから社会の知恵を学ぶ機会を失いつつあることを感じる。

デジタルの社会では、世間の出来事や流行の考え方が、瞬時のうちに、溢れるほど大量に、分かりやすく、面白く、繰り返し送信されてくる。

このデジタル情報として送信されて来る世間の様々なことを知ることと、諺でいう大海（世間）を知ることとは別である。逆に過剰な溢れるほどの情報に、私達は振り回され、情報が心の目を塞ぎ、世の中を見え難く、分かり難くしているのではないか。

膨大な情報に振り回されることなく、自らの立つところ、自からの考え、信ずるものを明確にすることが大切であると思うのだ。

自から立つところを問うにふさわしい諺がある。「井の中の蛙大海を知らず」の別例といわれるもので、正確なところは分からない。それは「井の中の蛙大海を知らず。されど天の深さを知る」というもの。「されど天の深く違ったものになる。「世間のことなど私は与かり知りません。ただ天（宇宙）の真実なる摂理、深い意味を知りたいのです」となる。大海（世間）など天（宇宙）に比べたら小さい小さいもの。天（宇宙）とは、私の存在を意味づける真実なる摂理ともいえるか。

この諺から想うのは、希有の知識人でありながら一人五合庵に暮らし、子供たちや村の人と交わられた良寛和尚のこと。わが浄國寺が少しでも天の深さを知る井戸となれば嬉しいのであるが。

# ワン公物語⑩

—華のつばやき—

山崎華（慎子代筆）

私は華。パグ犬の雌。六月で八才になる。

蓮姉ちゃんに較べて私は童顔で、体型も小作り。だから時折子犬と間違えられることがある。でも母さんに言わせると口の周りの黒い毛が次第に白くなってきてるんだって。しかもワン公のくせに嗅覚がおかしいし、近頃は目も耳も変なのだ。

薄暗い時など、母さんが呼んでも気付かなかったり、姿を見つけれなかったりするのだ。でも、マ、イ、か

溫和しい蓮姉ちゃんがまだ一匹だけだった時、ワン公部屋には困いや仕切りが一切なく一部屋全部がワン公部屋になっていた。

戸が開いていれば蓮姉ちゃんだって、別の部屋を覗いたり、外に出ることもあったそうなんだけど、自分で戸を開けるなんてことはなかったんだそう。

ところが蓮姉ちゃんが七才になって間もなく、私（華）という妹が同居犬になり、私の勝手気儘にすこく驚いたみたい。だって私ってば、自分の体がすっぽり入ってしまいそうなステンレスの餌皿を玩具にして遊ぶのが得意だったんだ。重さも大きさも十分な食器を

啞えて転がして遊ぶのを、蓮姉ちゃんはジッと見ていたんだよ。私にとってはどうってこととはなかったんだけどね。

そのうち私は母さん達が開け閉めする戸に興味を持ったのだ。私の小さな掌の細い爪をあててみる。ん、何とかなりそう。顔も使ってみる。いい感じ。少しづつ戸が開いて、いつも母さん達が話したり仕事をしているお勝手が目の前に広がった。

いつもと違う光景、でも何だか楽しそう。次の戸も開けてみる。今度もうまくできた！ 広くて長い廊下。抱っこされて見てた時よりうーんと広く見える。

嬉しくなって走ってみる。床に爪があたってコツコツ音がする。ちょっと滑りそうにもなるけど、私は運動神経ってやつが良いのだ。

母さんが「こゝはねナマンガブする所なんだよ。華もやってごらん」なんて無理に私の前足を合わせたりする「本堂」に行き着いた広いなあ、ヤッパリ。原っぱのつもりで走り廻る。良い気分！と思ってる所へ母さんがとんで来てしまった。私はにげるのだから上手。母さんが迫って来る、スルリと逃げる。母さんの奥の手が出る。「華、おやつあげよう。おいで」おやつという言葉は魔法の言葉だ。足が止まる。そしてスタスタと母さんにすり寄って行くのだ。そこで私の冒険は終わりになる。

最終的に困いの中に押し込められる迄、私は何度このささやかな冒険に挑んだことだろう。とうとう「脱走犯」なるあだ名がついてしまった。

そして作られた殆んど完璧な困いのことは、『大地』38号に載っているので省略。

困いは大いに不満だったけれど、蓮姉ちゃんが居た時はまだ良かったのだ。なにしろ蓮姉ちゃんは本当によく私の面倒をみてくれたからね。頑丈な困いが取り付けられた時、私達は抗議の声をあげた。「ナニするの！ヘンなもので狭い所へ閉じ込めないで！」

抗議の声も虚しく、作業は粛々と進められ私達は困いの中に閉じ込められた。「華、身から出た錆よ。脱走さえしなければ、こう迄しなかったのに」と母さんは言うけれど。

身を寄せ合うしかなかった蓮姉ちゃんと私は、一層親密になれたので、困いの効用もあったということ、マ、イ、か。

ところが、蓮姉ちゃんがああ夏の日、突然具合を悪くして二、三日苦しんで、そのまゝ私の前には二度と現れなかったのだ。

これはねえ、なかなかマ、イ、か、とはいかないんだよね。

（以下 次号）

